

清末の中国人留学生と「昆虫採集」、 そして浙江省「昆虫局」

SON Ansuk（孫 安石）

一 日中関係史の共同研究

神奈川大学人文学研究所の日中関係史研究会は、中国人留学生史研究という共同研究プロジェクトを進めており、今まで、大里浩秋・孫安石編として『中国人日本留学生史研究の現段階』（御茶の水書房、2002年）、『留学生派遣から見た近代日中関係史』（御茶の水書房、2009年）、『近現代中国人日本留学生の諸相』（御茶の水書房、2014年）、『中国人留学生と「国家」「愛国」「近代』』（東方書店、2019年）の4冊の研究成果を世に送り出している。

いまこの20年間を振り返れば中国人留学生をめぐる研究テーマは多様化し、従来の先行研究では注目されることが少なかった留学生の学費や財政の問題に注目した研究、留学生の日常生活に関する研究、中国人留学生監督処、清国留学生会館などに関連する研究など様々な進展が見られる。

筆者もこのような新しい研究動向に刺激を受けながら、2021年3月に開催された東京大学EAAオンライン・シンポジウム「一高中国人留学生と101号館の歴史」において「清末から民国時期の日本留学案内書の系譜第一章宗祥『日本遊學指南』を中心に」というタイトルの口頭報告を行い、その後『留学生鑑』（啓智学社、1906年、中国語）を取り上げた論稿を

『近代東アジアと日本文化』（銀河書籍、2021年7月）に発表している。

とくに、『留学生鑑』を取り上げた上記の論稿においては、同書が日本国内の学生向けの生活案内書であった堤秋水『學生之寶』（松声社、東京、1902年）を、その体裁、形式、内容の面においてほぼ全面的に翻訳したことを紹介した。そこでは、『留学生鑑』が中国人留学生の日本での生活に必要な情報として訳出している「第一章 立志」以下の日本での住居、衣服、食物、睡眠などのほとんどの部分が堤秋水の『學生之寶』と同一の内容であることを指摘し、「第十五章 読書法」、「第十六章 記憶術」では欧米から輸入された読書法、記憶術という近代的な智識が日本に輸入され、そのあと、中国へ翻訳される過程について若干の考えを述べた¹⁾。

本稿では『留学生鑑』後半の「第十九章 博物採集」が取り上げる昆虫採集という項目が当時の中国人留学生の目にどのように映っていたのか、または、学生が学ぶべき事項として認識されたのか、を紹介したうえで、1910年代の後半に中国の浙江省、江蘇省などで設立された「昆虫局」とはどのような関係があるのかについても、若干触れておきたい。結論から言えば、浙江省、江蘇省などに設立された昆虫局という組織は、農作物の病虫害の予防と駆除を担当した部署で、清末の中国人留学生が関心を寄せていた「昆虫採集」とは直接の関係はない事柄であるが、「昆虫」をめぐる日中の交流の一旦を窺う興味深い内容として書き留めて紹介することにしたい。

二 『留学生鑑』と昆虫採集、植物採集

『留学生鑑』の「第十八章 博物採集」が翻訳の底本とした日本の『學生之寶』は、博物採集の最初の項目として「昆虫採集」を取り上げ、昆虫採集の方法、標本の製法を説明している（【図1】を参照）。例えば、昆虫

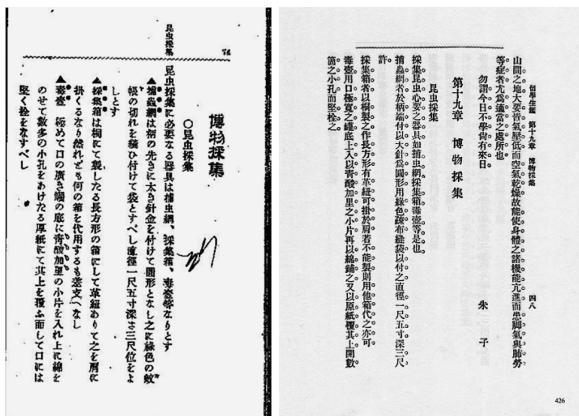
採集の方法では次のように記述している。

「天気晴朗なるとき山野を逍遙し草花の咲きたるところに行けば種々の美麗なる蝶類及び其他の昆虫の居るをみるべし。(中略) 甲虫類は樹木の腐りたる空洞の中に多く居るものなれば之を搜索すべし。また腐敗したる肉類を地上に置けば之に集まり来るものなり」²⁾

中国語の『留学生鑑』が「天気晴朗」で始まる部分から、腐敗した肉類を置けば甲虫が集まることを一字一句違わず翻訳していることには驚くが、このような正確な訳は「標本の製法」にもつづき、蝶類を標本とするときに使う展翅板の製法にもそのまま適用され、板は巾二寸長さ一尺位に切り、その上に巾八分厚さ六七分ほどの板を同じく一尺位に切った二本を並べ、中に溝ある展翅板を作る、としている。

続けて『學生之寶』は、植物採集に用いる採集箱として、ブリキ製の長二尺高五寸の円筒状のものに革製の紐を繋げ携帯することを提示し、専用

【図1】堤秋水『學生之寶』(1902年、左)と『留学生鑑』(1906年、右)の「博物採集」の部分



のブリキ採集箱がない時には茶入または海苔箱を代用しても良いとしているが、『留学生鑑』はブリキの翻訳として「布里幾」を当てながら、その代用品としての茶瓶と海苔箱を使うこともまた正確に翻訳している³⁾。

ここで博物採集に関する日本語の『學生之寶』と中国語の『留学生鑑』を紹介しながら気づくことは、20世紀初期の中国の学生にとって昆蟲採集、植物採集という近代的な生物の分類学が必要であるという認識が中国語で翻訳された『留学生鑑』の内容からうかがうことができるという点である。日本語の『學生之寶』にみえる博物採集（昆蟲・植物・鉱石採集）という考え方方が、明治時代の日本国内に紹介された昆蟲採集に関する智識の蓄積の上に書かれているのは言うまでもない。

松良俊明の「『昆蟲採集』の教育的意義についての一考察」によれば、日本における昆蟲採集の先駆けは江戸時代にみることができるが、捕虫網で捕えた昆蟲を針で刺し、ラベルを付けて保存するという近代的な昆蟲採集が普及したのは明治初期のこと、とくに、1870年代後半から1880年代にかけては、学校の教員が昆蟲採集に熱中し、その影響を受けた子供らの間でも昆蟲採集が流行するようになった、という。その後1881年の「小学校教則綱領」によって、小学校の自然科学系の科目として博物が採用され「動物、植物、金石の標本等を蒐集すること」が明記されることになり、日本の昆蟲採集の大衆化の流れは明治政府によって進められた、という指摘は極めて妥当な評価であると言えよう⁴⁾。

ところが、明治期の昆蟲学においては、民間の流れとして日本昆蟲学会が1917年に設立されたことが重要であるらしい。インターネットで公開された「日本昆蟲学会80年の歩み」によれば、日本で最初の昆蟲学専門の学会が創設されたのは1905年の「日本昆蟲学会」が嚆矢であったが、運営難から4年間で活動を停止し、のちの1917年に農務省林業試験場の矢野宗幹、木下周太、小島銀吉や農科大学の伊藤盛次らの呼びかけで「東

京昆蟲学会」が設立され、これが現在の日本昆蟲学会の出発点である、といふ⁵⁾。

『學生之寶』が学生の余暇活動として博物採集という項目を設けたのは、ちょうどいま述べたような明治時代の影響を色濃く反映したものであり、清末の中国人留学生に日本の生活を紹介する『留学生監』は、日本人の博物採集という余暇活動に大いに興味を持ったことがわかる。

この余暇活動としての昆蟲採集が1910年代の中華民国時期にどのように伝播したのかなどについては、いま一つ不明なところが多いが、中国における1910年代後半の昆蟲をめぐる問題は、農業と病虫害との関係で各地方政府からも重要視され、1922年の江蘇省「昆蟲局」の設立を皮切りに1924年には浙江省「昆蟲局」が、そして、江西省、湖南省、河北省などに相次いで昆蟲局が成立したようだ。

三 中華民国時期の浙江省「昆蟲局」と日本

中華民国時期に各省に設立された「昆蟲局」については、中国でも先行研究がいくつか発表されており、李志英の論考「昆蟲局与農業虫害防治（1921－1937）」の論稿によってその概略をうかがうことができる⁶⁾。

李によれば、1919年頃から江南地方の江蘇省などでは農業、とくに綿業に被害を与える病虫害がたびたび発生し、大幅な生産減少がみられ、その対策の一環として1922年1月には、アメリカ人のカリフォルニア農科大学の Wood Worth を局長兼主任技師とした「昆蟲局」が設置され、アメリカのコーネル大学などに留学した中国人らが加わり、活動を開始したという。その後、1924年には浙江省にも「昆蟲局」が設置され、いよいよ中国でも昆蟲の分類研究、昆蟲の生活研究、殺虫剤の研究などが本格化することになるが、これら農業と病虫害との関連の昆蟲研究においては

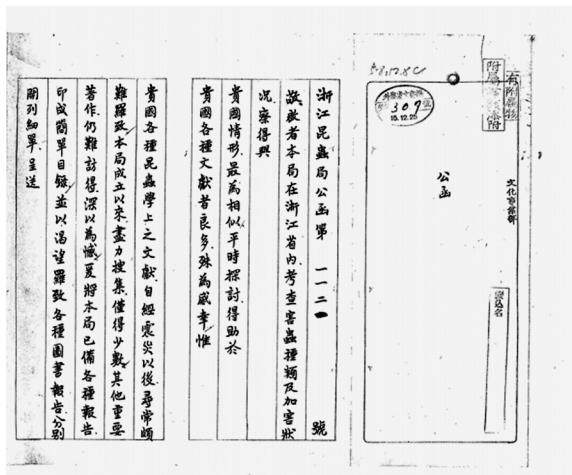
アメリカ留学組が大いに活躍した、という。この時期の昆虫局の活動については、『浙江省昆虫局概要』、『浙江省昆虫局年刊』（1934年）などの資料が現存することから今後、その活動の究明が待たれるが、もちろん、これら昆虫局と日本との関係が全くなかったわけではない。

例えば、日本の外務省外交史料館の資料のなかの「浙江省昆虫局ニ図書寄贈」（請求番号 B05016027800、H-6-2-0-26_004）には、1927年を前後した時期の浙江省昆虫局が、日本の外務省を経由し、日本語による昆虫に関連する印刷物と図書の寄贈を依頼するやり取りが収められている。以下、これらの資料を手がかりに若干、日中の昆虫に関連する図書の寄贈関係について紹介していく。

ことの発端は、1926年12月15日の日付で発信された浙江省昆虫局の公式書簡第1121号により始まる。すなわち、浙江省の昆虫局は、同省内の昆虫の種類及び加害状況を調べていたところ、農作物の被害状況が日本と近似していることから、中国側が保有している日本の病害虫の関連文献目録を提示しながら、昆虫局がまだ入手していない各種の書籍と昆虫標本などを入手したい旨を杭州の領事館を経由して求めてきたのである（【図2】を参照）。

ところが、この要請を受けた日本の外務省は事情をよくつかめず、杭州領事館に浙江省昆虫局の現状などを調査するよう指示を出すことになる。その後、この調査を受けた杭州の領事館警察の末永金之助は、翌年の2月1日付きで杭州領事代理清野長太郎宛に「浙江昆虫局調査復命書」（以下、「報告書」と略称する）を提出している。この「報告書」によれば、浙江昆虫局は、浙江省嘉興県の城内の天寧寺街に位置し、独立建ての間口僅か20尺、奥行き20尺の二階建ての建物で一階に研究室と標本陳列所が置かれるのみの規模極めて小さい組織であったが、局長の費穀祥は事務熱心で相当な成績を挙げている、と評価している。そして、経費の面で、毎

【図2】浙江昆虫局公函第1121号（一部）



(出典：外務省外交史料館「浙江省昆蟲局ニ図書寄贈」、請求番号B05016027800、H-6-2-0-26_004、所収)

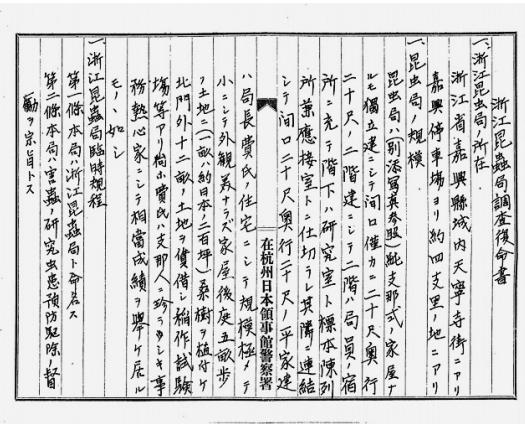
月浙江省財政厅より経費が支給され、毎年の経費は総予算額6024元で運営されていた、という（【図3】を参照）。

しかし、このような恵まれない状況の中でも浙江昆虫局は、優れた事業成果を残していたようで、「報告書」の項目「開辦以来の事業一般」は次のような内容を記載している。

「本局の事業は研究、宣伝及び駆除螟虫の督励を主とし他の害虫及び螟虫駆除の状況は中華農学会報に登載し、其他出版物已に三十余種あり（比較的重要なるものは直接文化事務局に郵送）、更に局員の著作に係る比較的長編数種は経費の関係上自ら印行し能はざるにより上海商務印書館に印刷発行せしめ居れり。本年もまた陸續出版の筈なり」

浙江昆虫局から日本側へ出された昆虫学に関する書籍と標本などの寄贈希望は、以上のような過程を経て、外務省文化事業部において再度、意

【図3】「浙江昆虫局調査復命書」(一部)



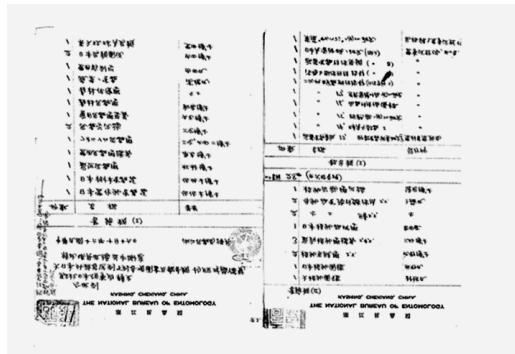
(出典：外務省外交史料館「浙江省昆虫局ニ図書寄贈」、
請求番号 B05016027800、H-6-2-0-26_004、所収)

見が収斂され、外務省文化事業部は1927年10月に昆虫局に対する図書寄贈の予算補助を正式に決定することになる。すなわち、日本側は、浙江省における農作物に対する予防、駆除研究を行う浙江昆虫局が、その研究の範を日本にとっており、参考図書の収集に努めているが、経費が不足していることに鑑み、約239円余に相当する図書を寄贈することにしたのである。

【図4】は、浙江昆虫局が杭州の日本領事館を経由して受け取った図書及び報告書類の詳細を記録した受領証である。

このような昆虫に関する書籍の寄贈をめぐる外務省の対応は、日本の他の官公庁をも刺激したらしい。例えば、農林省農務局は1927年4月に外務省の文化事業部宛に「印刷物送付に関する」という公文を送信している。それによれば、今回の昆虫に関する書籍の寄贈は外務省が推進する日本と中国の文化事業として有意義であることは勿論、中国の農業の発展に日本が貢献できることで、両国の共存共栄という観点からも極めて

【図4】浙江省昆虫局が受け取った書籍の受領証（一部）



(出典：外務省外交史料館「浙江省昆虫局ニ図書寄贈」、
請求番号 B05016027800、H-6-2-0-26_004、所収)

重要なことで、両国の今後の農業部門においても活発な交流を図りたいと
いうことを述べたのち、以下の印刷物を浙江省昆虫局宛に送付したいこと
を伝えている⁷⁾。

- 一 日本産介殻虫科デアスピ亜科に関する研究（其一）
- 一 浮塵子駆除予防指針
- 一 病菌害虫駆除主任技術官協議会要録
- 一 稲熱病に関する研究
- 一 菜蘿サルサムルに関する研究成果
- 一 葡萄害虫「フィロキセラ」と其の防除法
- 一 馬鈴薯葉捲病に関する件
- 一 貯穀害虫及其の駆除予防に関する調査研究成果（第一報）
- 一 病菌害虫防除要綱
- 一 二化性蝗虫駆除予防奨励指針
- 一 日本産実蠅科に関する研究

一 日本産蜜柑蠅の研究

また、北海道農事試験場は、ちょうど時を同じくし、1927年3月には浙江省昆虫局が所蔵していない刊行物の内、報告第17号「キビクビシアブラムシに関する調査」、彙報第27号「蘋果樹病害虫の防除」、彙報第36号「甜菜の病害虫とその防除法」、彙報第39号「大豆の害虫防除」、彙報第42号「北海道農園芸害虫目録」を寄贈することを申し出ている⁸⁾。

結びにかえて

以上、本稿は清末の中国人留学生の日本生活を案内する書籍『留学生鑑』に昆虫採集という項目が取り上げられていることを紹介し、1920年代には江蘇省と浙江省などにおいて病虫害を駆除すること目的に「昆虫局」が設立され、また、日本との間では外務省を経由し、昆虫に関連する書籍と標本などの交換をめぐるやり取りが行われたことについて触れた。

中国人留学生史の研究という分野を開拓したさねとうけいしゅうは、1973年に刊行した『日中非友好の歴史』のはしがきに次のような一文を掲載している⁹⁾。

「この一世紀あまりは、日中間は、ざんねんながら、非友好の連続であった。この非友好を、よく見きわめ、その非友好の原因、根っこを、とりのぞいてしまわなければ、ほんとうの友好はやってこない。中国大陸において、日中両国がはげしくぶつかったのは、日清戦争、五四運動、日中戦争の三つの時代といえよう。」

ところが、この一世紀あまりの非友好の連続であったという定義のなか

で綿々と続いたのは、両国を行き來した留学生の交流であったように思える。この人的交流の流れを保証したのはときの政治であり、ときの経済条件であったことは間違いないが、そこで得られた成果は時には思わぬ方向へと発展したことがあったのではないかろうか。本稿がとりあげた清末の中国人留学生が注目した昆虫採集はその後、中国でどのように広がったのだろうか。また、中国の学校教育には果たして取り組まれることはあったのか、あるいは、学生の夏休みの課題としても定着することはなかったのか。1920年代の中国の各地で設置された「昆虫局」をめぐる日中の交流は、1930、40年代にはどのような展開を見せることになるのか、まだまだ興味は尽きない。

注

- 1) 本稿で取り上げた『留学生鑑』の原文は『中国近代教育文献叢刊』全24冊、浙江教育出版社、2020年3月所収を参考にした。
- 2) 堤秋水『學生之賓』松声社、東京、1902年、74~79頁。
- 3) 『留学生鑑』、前掲書、48~52頁を参照。
- 4) 松良俊明「『昆虫採集』の教育的意義についての一考察」、『京都教育大学環境教育研究年報』、第1号、1993年3月。
- 5) 日本昆虫学会の記述については、<http://www.entsoc.jp/about/ayumi.php> を参照のこと。
- 6) 李志英「昆虫局与農業虫害防治（1921~1937）」、『北京師範大學學報』、社会科学版、2017年、第3期、所収。
- 7) 外務省外交史料館「浙江省昆虫局ニ図書寄贈」、請求番号B05016027800、H-6-2-0-26_004、所収。
- 8) 外務省外交史料館「浙江省昆虫局ニ図書寄贈」、請求番号B05016027800、H-6-2-0-26_004、所収。
- 9) さねとうけいしゅう『日中友好の歴史』朝日出版社、1973年。